恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークにおける文化遺産の保存と活用

Preservation and utilization of cultural heritage in the Dinosaur Valley Fukui Katsuyama Geopark

目次

ページ

目次 I
表目次 II
図目次 III
写真目次 IV
第 1 章：はじめに 1
第 2 章：勝山市概要 2
第 3 章：恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク 6
1. ジオパークの概要 6
2. 恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークの概要 6
3. 恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークの現状 8
第 4 章：勝山ジオパークの文化遺産 10
1. 白山平泉寺旧境内 10
1.1 白山平泉寺旧境内概要 10
1.2. 白山信仰と白山平泉寺の歴史 13
1.3. 白山平泉寺旧境内の保存・活用状況 18
2. はたや記念館ゆめおーれ勝山 21
2.1. はたや記念館ゆめおーれ勝山の概要 21
2.2. 勝山における織物業とゆめおーれ勝山の歴史 21
2.3. ゆめおーれ勝山の活用状況 26
第 5 章：勝山ジオパークにおける文化遺産 27
第 6 章：おわりに 29
謝辞 31
参考文献 31

表目次

ページ

表 1：勝山ジオパークにおけるサイト分類表（2017 年） 7

表 2：白山平泉寺及び白山信仰年表(682～2017 年) 16

表 3：はたや記念館ゆめおーれ勝山及び勝山の織物業年表(1874～2015 年) 23

図目次

ページ

図 1：福井県勝山市の位置（2017 年） 3

図 2：勝山市の概観と調査対象（2017 年） 3

図 3：白山平泉寺旧境内周辺の地形図（2017 年） 11

写真目次

ページ

写真 1：白山平泉寺歴史探遊館まほろば　11

写真 2：東尋坊跡地　12

写真 3：御手洗池　14

写真 4：南谷の石畳　15

写真 5：境内の景観　19

写真 6：はたや記念館ゆめおーれ勝山　22

写真 7：蚕の繭巻き取り体験コーナー　22

第1章：はじめに

本研究は白山平泉寺旧境内とはたや記念館ゆめおーれ勝山（以下ゆめおーれ勝山）を事例に、恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク（以下勝山ジオパーク）における文化遺産の保存・活用状況やジオパークとの関わりについて解明することを目的としている。

勝山市は2009（平成21）年に「恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク」として日本ジオパークの認定を受けたが、2013（平成25）年の再審査では日本ジオパーク委員会から「重大な欠陥」という指摘と共にイエローカードが出された。このことが契機となり、それまで取り組んでいたエコミュージアム活動とジオパーク活動の一体化、地域住民との協力関係の構築など、既存の取り組みを見直した。その結果、ジオパークは勝山市の「第5次総合計画」に据えられるほど、活動は大きく前進した。

しかしながら、ジオパークで注目を浴びているのは主に恐竜化石などの地学的遺産であり、文化遺産の活用に課題を残していると言える。ただし、福井県勝山市は日本有数の恐竜化石の産地であり、世界3大恐竜博物館としても数えられる福井県立恐竜博物館が2000（平成12）年から開館したのをはじめに、2015（平成27）年には実物大の大きさの恐竜のモニュメントなどを見ることができるディノパークなど、恐竜をテーマにした博物館施設が設立され、恐竜を活用した観光振興が盛んに行われてきた背景がある。

その一方で、717年に開かれた巨大な宗教都市の発展や衰退が残っている白山平泉寺旧境内や、勝山市の織物業や繊維産業の発展・歴史などについて展示されているはたや記念館ゆめおーれ勝山など、地域文化を伝える文化遺産も存在し、これらは文化財として保存され、観光にも活用されている。

現在の勝山市において、これら文化遺産を観光地としてみると、恐竜化石ほど観光に大きな影響を与えていないものの、勝山の地域性を語る上では必要不可欠なものであるためその保存と活用について実態を解明する必要があると考える。

本研究の調査対象は勝山ジオパークの中の「白山平泉寺旧境内」と「はたや記念館ゆめおーれ勝山」である。調査方法は文献調査と統計データから、勝山市の観光の歴史、観光客の動態を明らかにし、観光協会や行政、関連施設の運営者の他、教育や保全を行なっている団体などへのヒアリング調査から文化遺産の保存と活用方法を明らかにする。

以下、第2章では福井県勝山市の概要について、第3章ではジオパークの定義や概要、勝山ジオパークの内容や状況について、第4章では調査対象の白山平泉寺旧境内とゆめおーれ勝山の概要や歴史、保存・活用状況について、第5章ではジオパークにおける文化遺産を活用・保護していく理由や今後について、第6章では本論文のまとめを記す。

第 2 章：勝山市概要

図 1 は福井県勝山市の位置である。勝山市は福井県嶺北地方の東北部にある奥越地方にあり、2017 年 4 月 1 日現在、人口 23,978、面積は約 253.9km^{2}の市である（勝山市.2017,p17）。白山を挟んで石川県と隣接しており、県下最大河川の九頭竜川上流に位置する。図 2 は勝山市の概観である。周辺を経ヶ岳などの 1,000m 級の山々に囲まれた盆地地形で、そのため風が吹きにくく、一年を通して高い湿度となる。年中湿度が高いことは生糸を織る際の静電気の発生を抑えて糸を切れにくくし、勝山市で織物業が発展した要因の一つとなった。勝山市は明治時代以来の地場産業である織物・繊維産業を中心とした商工業、古くから盛んな農林業を基盤産業とした田園都市である（福井県勝山市.2008,p1）。

白山信仰の越前の拠点として 717 年に白山平泉寺が勝山で開かれた。戦国時代には 8,000 人の僧兵がおり、当時の日本では最大級の宗教都市にまで成長したが、1574 年に一向一揆との抗争に敗れて焼失した。白山平泉寺の勢力が当時の村岡山城に攻めた際に一揆勢力が反撃し勝利したことをきっかけに村岡山は「勝ち山」と称され、それが現在の勝山の地名の由来になったと言われている（勝山市.1974,p923）。

勝山市は気温の日較差・年較差の大きな内陸性気候を示し、冬季は積雪が観測される。勝山市（1974）によると、冬季の積雪量は福井県でも有数であり、交通状況などに多大な影響を与える。その一方で、大量の積雪によって勝山市の大きな観光事業の一つであるウィンタースポーツが盛んになった。勝山市には現在、雁が原スキー場とスキージャム勝山の二つのゲレンデがある。雁が原スキー場は 1956（昭和 31）年から、スキージャム勝山は 1993（平成 5）年から開業した。両方ともスキーやスノーボードのゲレンデとして使用され、県内の小学校や中学校、高校では毎年冬になると雁が原やスキージャムでスキー教室が開かれることもある。特にスキージャム勝山は西日本最大級のゲレンデとして宣伝されており、周辺には毎年 25,000 人以上の観光客が訪れる（勝山市.2017,p63）。

九頭竜川の両岸には七里壁と呼ばれる河岸段丘が見られ、市街地はその河岸段丘上に形成されている。河岸段丘とは谷底平野が地殻の隆起や海面の低下などにより浸食され、河川の両側または片側に形成される階段状の地形である。九頭竜川の右岸には二、三段の河岸段丘があり、平泉寺町の大渡から隣の市町村である永平寺町鳴鹿まで断続的に続いている。大渡では高さ十メートル以上の段丘崖が発達し、斜面は集落、崖下の段丘面上は水田として利用されている（勝山市.1974,p11-19）。

勝山市には石川県手取川流域に発達している中生代の地質と同時代の手取層があり、この手取層群は九頭竜川の上流一帯に広く分布している。手取層群は中生代のジュラ紀から白亜紀に属しており、当時陸上では恐竜に代表される爬虫類が全盛期を極めていた。

北谷地区には日本最大の恐竜化石の発掘地がある。1988（昭和 63）年に北谷町杉山で約１億２千万年前の肉食恐竜の化石発見されたことを皮切りに発掘作業が開始されており、これまでにフクイサウルスやフクイラプトル、コシサウルス、フクイティタン、フクイベナートルといった新種の恐竜化石が発掘されている。これらの恐竜化石や発掘現場は 2017

図 1：福井県勝山市の位置（2017 年）

（国土地理院地図に筆者加筆）

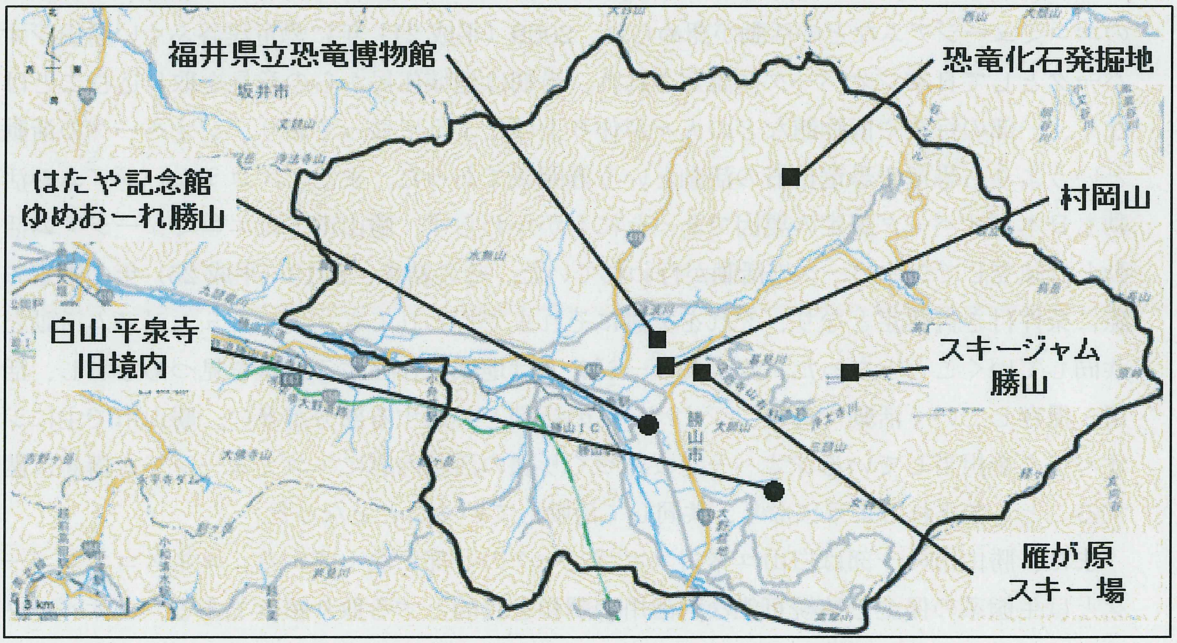

図 2：勝山市の概観と調査対象（2017 年）

（国土地理院地形図に筆者加筆）

年 2 月 9 日に国の天然記念物に指定された（勝山市.2017,p4-12）。

恐竜化石は勝山市にとって重要な観光資源である。平成 12 年（2000 年）に勝山市で恐竜エキスポふくい 2000 が開催され、入場者が 80 万人集まった。同年、恐竜をはじめとする多くの化石やそのレプリカなどを展示し、恐竜が生きていた当時の地球についても学べる施設である福井県立恐竜博物館が開館した。観光政策課作成の観光地別入込状況調査によると、2016（平成 28）年の年間入込状況は約 88 万であり、勝山市全体の約 44%を占めている。北谷地区にある発掘現場には野外恐竜博物館が 2014（平成 26）年から始まり、福井県立恐竜博物館から専用バスが出るツアー形式で見られる。

一方で恐竜エキスポ 2000 が行われた後、勝山市民の間ではその成果をどのようにまちづくりに活かしていくか、どのように伝統を若い世代につなげていくかなどについて議論が行われた。勝山市には白山平泉寺旧境内や勝山左義長のような歴史遺産、豊かな生態系や河岸段丘のような自然遺産、煙草産業や機業のような産業遺産など、多くの遺産が存在する。このような遺産を若い世代へ伝えていこうという機運が高まり、またこれらの遺産はエコミュージアム形成の土台になるということもあり、2002（平成 14）年から勝山市エコミュージアム推進計画が策定された。エコミュージアムとは、ある地域全体を屋根のない博物館としてとらえ、史跡や建造物などを遺産として保存・活用し、住民が主体となって動く地域づくりの手法である（勝山市エコミュージアム推進計画）。

2007（平成 19）年に福井県から勝山市にジオパークとして活動してほしいという要望があり、日本ジオパークへの申請を行なった。そうして勝山市は恐竜化石の価値やそれまでのエコミュージアムなどの活動が認められ、2009（平成 21）年に恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークとして日本ジオパークに認定された。当初は地域住民からの意見を取り込むことはなく、一部の行政や博物館などの人々が作り上げたようになっており、ジオパークの活動というよりも恐竜や恐竜化石の活動という雰囲気であった。また、エコミュージアムの活動も日本ジオパーク認定の要因であったにもかかわらず、勝山市ではエコミュージアム活動とは独立してジオパークの活動が行われていた。その結果、2013（平成 25）年の審査の際に条件付き再認定となり、それを契機にそれまで行われてきたエコミュージアム活動と共同していくこととなった。エコミュージアムは地域に存在する遺産を見つめなおし、活用・保存していく活動であり、ジオパークの活動と共通する部分が多い。勝山市で主にジオパークを担当しているジオパークまちづくり課の活動内容にエコミュージアム構想に関することも含まれるようになり、共同して活動していくこととなった。

また、勝山市の一部は白山ユネスコエコパークの一部になっている。ユネスコエコパークとは生態系の保全と持続可能な利活用の調和を目的とする取り組みである。ジオパークとエコパークの大きな違いは、対象となっているのが地学的遺産か生態系か、ジオパークはジオサイトを定めるのに対してエコパークは厳格に保護保全していく核心地域、教育・研修・エコツーリズムが行われる緩衝地域、人が生活しながら自然と調和した持続可能な発展を実現する移行地域の 3 地域を定めていることなどが挙げられる。勝山市の一部が白

山ユネスコエコパークの緩衝地域と移行地域に定められている。白山ユネスコエコパークは白山で形成されてきた生態系などの自然、文化、それらを伝えている人々の生活などを目玉としている。勝山市は特に白山信仰の拠点である白山平泉寺や、白山に影響されてきた気候、それによって育まれてきた産業や、文化、石川県にも分布する手取層群で採掘される化石などを見所としている（白山ユネスコエコパーク HP）。このように、勝山市の産業や文化は白山に大きく影響されてきた。

第 3 章：恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク

1. ジオパークの概要

ジオパークとは地球・大地の上で成り立ってきた生態系や人々の生活、文化、産業、歴史などを保護・活用していく取り組みである。世界ジオパークネットワークは、ジオパークの定義について次の 6 項目を定めている。①ジオパークは地域の地史や地質現象がよくわかる地質遺産を多数含むだけでなく、考古学的・生態学的もしくは文化的な価値のあるサイトも含む、明瞭に境界を定められた地域である。②公的機関・地域社会ならびに民間団体によるしっかりした運営組織と運営・財政計画を持つ。③ジオツーリズムなどを通じて、地域の持続可能な社会・経済発展を育成する。④博物館、自然観察路、ガイド付きツアーなどにより、地球科学や環境問題に関する教育・普及活動を行う。⑤それぞれの地域の伝統と法に基づき地質遺産を確実に保護する。⑥世界的ネットワークの一員として、相互に情報交換を行い、会議に参加し、ネットワークを積極的に活性化させることである。2017 年現在、日本にはジオパークが 43 か所あり、そのうちユネスコ世界ジオパークとしても認定されている地域は 8 ヶ所である（日本ジオパークネットワーク HP）。

ジオパークの保護・活用の対象となる。重要な遺産をジオサイトとして指定する。ジオサイトは地質学的価値のある場所の他に、生態学的価値のある遺産や文化的価値のある遺産、博物館なども含めていたが、現在は地質学的遺産をジオサイト、生態学的遺産をエコロジカルサイト、文化的遺産をカルチュラルサイト、博物館などのジオパークのベースになる施設を拠点施設など、より詳しく分類しようとする動きがある（聞き取り調査による）。

2. 恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークの概要

勝山ジオパークは勝山市全体をジオパークのエリアに指定している。テーマは「恐竜はどこにいたのか？大地が動き、大陸から勝山へ」であり、恐竜が大陸で生きていた時代から勝山市で恐竜化石として発見されるまでの間の遺産や人々の営みなどを学べるジオパークである。勝山ジオパークはさらに三つのテーマに分かれており、メインテーマである恐竜化石やその発掘地、恐竜が生きていた当時の地層などについて学べる「恐竜・恐竜化石エリア」の他に、新生代第四紀の火山やその火山活動、それによってできた地形などが学べる「火山と火山活動エリア」、河川によって浸食されてできた地形や湧水、それらを利用して発展してきた産業などについて学べる「九頭竜川などの河川とその地形エリア」がある（恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク HP）。

聞き取り調査によると、他の日本ジオパークと同様に、ジオサイトを詳細に分類する動きが勝山ジオパークでも見られるという。具体的には、北谷の化石発掘地や七里壁などはジオサイト、池ヶ原湿原などはエコロジカルサイト、ゆめおーれ勝山や白山平泉寺旧境内はカルチュラルサイト、福井県立恐竜博物館は拠点施設に分類される。表 1 は勝山ジオパークの各サイトがどのエリアに属するか、またジオサイトやエコロジカルサイト、カルチュラルサイト、拠点施設を独自に分類した表である。

表 1：勝山ジオパークにおけるサイト分類表（2017 年）

	恐竜と恐竜化石	火山と火山地形	九頭竜川となどの河川とその地形
ジオサイト	恐竜化石発掘地 夫婦滝	スキージャム勝山 弁ヶ滝 御堂之滝 釣鐘岩 大矢谷白山神社の巨大岩塊 樫ヶ壁	七里壁 大清水 樫ヶ壁
カルチュラルサイト	-	-	白山平泉寺旧境内 はたや記念館ゆめおーれ勝山
エコロジカルサイト	-	池ヶ原湿原 ため池	-
拠点施設	福井県立恐竜博物館 勝山恐竜の森	-	-

（勝山ジオパーク HP を参考に筆者作成）

注）－：該当なし

恐竜・恐竜化石エリアには恐竜化石や等身大骨格標本、ジオラマなどで恐竜やその恐竜が生きていた時代、地球の歴史などについて学べる福井県立恐竜博物館や、フクイサウルスをはじめとする多くの恐竜や他の生物の化石が発掘されてきた北谷の発掘地が含まれる。火山と火山活動エリアには、岩屑なだれの堆積物が二次的に地すべりを起こしてできた窪地に湧水や雨水が貯まって生態系が形成された池ヶ原湿原や、経ヶ岳の噴火による山体崩壊に伴う岩屑なだれによって運ばれた大岩が見られる大矢谷白山神社の巨大岩塊がある。九頭竜川などの河川とその地形エリアには、長さ 20 ㎞以上にわたる河岸段丘の崖である七里壁や、その河岸段丘から浸透する雨水や地下水が湧き出ている大清水などがある（恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク HP）。また、ゆめおーれ勝山では豊富な地下水や湿潤な気候を利用して発達してきた勝山市の基盤産業である繊維業の技術や歴史が学べ、や白山平泉寺は形成に九頭竜川や湧水などの影響を強く受けているため、双方とも九頭竜川などの河川とその地形エリアのカルチュラルサイトとする。

3. 恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークの現状

勝山ジオパークの状況や課題、それらの改善策などについてヒアリング調査を行なった。

勝山ジオパークは一つの市全体がジオパークのエリアである。単独自治体での活動のため、複数の自治体にまたがっているジオパークのように連携を取る必要がない。その反面、複数自治体での活動のように広域ではないため、県からの支援が受けづらいというデメリットがある。勝山ジオパークでは、デメリットを意識するよりもメリットを活かせるように心がけている（聞き取り調査による）。

勝山ジオパークの正式名称は「恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク」であり、メインテーマである恐竜化石は大きな利点である。実際に恐竜・恐竜化石エリアの代表である福井県立恐竜博物館には年間 80 万人以上が来館する。そのため勝山ジオパークのメインテーマである恐竜や恐竜化石のイメージが強く残るが、火山と火山活動エリアや九頭竜川などの河川とその地形エリアなどの印象が弱くなるというマイナス面も含んでいる。このような状況を改善するため、勝山ジオパークでは恐竜博物館の駐車場のスペースにジオターミナルという施設が 2018 年度オープンする予定である。このジオターミナルでは観光案内などを行ない、それまでの恐竜博物館へ訪れた客がそのまま帰るという流れを、ゆめおーれ勝山などの他のエリアへ行くという流れに変えようとしている。

ジオガイドが不足していることも課題である。勝山ジオパークにはジオガイドが活動できる場が少なく、ジオガイドの養成を行なっても実際にジオガイドとして活動する機会があまりなかった。その対策として、花月楼というレストランを利用した客の中で、希望者に勝山市の町案内をするというツアーが 2017 年から行われている。花月楼は国の登録有形文化財である建物であり、それを改修してレストランとして利用している。毎週土曜日に 2 回行われ、所要時間は約 45 分である。花月楼は勝山市の市街地付近にあり、大清水や河岸段丘などの近くに所在する。そのため町案内では九頭竜川などの河川とその地形エリアに

関する場所を中心に案内する。まだこの活動は始まったばかりで模索段階だが、ジオガイドを利用してジオパークにお金を使うという仕組みができるよう考えられている。

第 4 章：勝山ジオパークの文化遺産

勝山市には越前地方で発展した民家の特徴を残した旧木下家住宅や、明治時代に建てられて文明開化の世相が反映された深谷家住宅洋館など、多くの文化遺産がある（勝山市商工観光部観光政策課 HP より）。本研究では中世から大きく成長し、「勝山」の地名の由来にも関わった白山平泉寺の遺構が残る「白山平泉寺旧境内」と、江戸時代から始まって勝山の基盤産業にまで成長した織物業の歴史や現在までの状況について展示された「はたや記念館ゆめおーれ勝山」を事例にジオパークにおける文化遺産のあり方を検討する。

1. 白山平泉寺旧境内

1.1. 白山平泉寺旧境内概要

白山平泉寺は 717 年に泰澄大師が開いた白山信仰の福井県における拠点である。白山平泉寺という名称が定着したのは 13 世紀以降で、それまでは境内の一角から湧き出る清水から、「平清水」や「白山社」と呼ばれることが多かった。定着後は「平泉寺」や「白山平泉寺」と呼ばれている（勝山市教育委員会.1997）。明治時代初期の神仏分離政策により現在の名称は「平泉寺白山神社」となったが、国史跡としての名称は「白山平泉寺旧境内」である。本論文では泰澄大師が開いた白山信仰の寺院を「白山平泉寺」、現在の神社としての名称を「平泉寺白山神社」とする。また、国史跡やジオサイトとして白山平泉寺の境内も含めた全体を「白山平泉寺旧境内」とする。

白山平泉寺は白山へ登るための道の拠点でもある。白山の山頂は禅定と呼ばれ、そこへの道のりを禅定道という。禅定道は三つあり、越前・加賀・美濃のそれぞれからの禅定道がある。三つの禅定道の拠点は三馬場と言われ、それぞれ越前馬場、加賀馬場、美濃馬場と呼ぶ。越前馬場が白山平泉寺である。それぞれの馬場は白山山系の水が流れる場所に成立している。これは白山信仰が水を平野部に分け与えるという水分りの神として信仰されていることに関係していると言われる。

図 3 は白山平泉寺旧境内周辺の地形図である。白山平泉寺旧境内は勝山市の南東部、平泉寺町平泉寺区に所在する。平泉寺区はその大部分が法恩寺山や経ヶ岳などの勝山市内にある火山が形成した斜面に立地している。尾根が平泉寺区の中央を東から西へ続いており、この尾根上に現在の平泉寺白山神社境内がある。この尾根を中心にして南側を「南谷」、北側を「北谷」と呼ぶ。

旧参道は白山平泉寺旧境内の西部にあり、旧参道の南に白山平泉寺歴史探遊館まほろば（以下まほろば）がある（写真 1）。まほろばは 2012（平成 24）年にオープンした施設で、白山信仰や泰澄大師に関する白山平泉寺の歴史、それに関わる勝山市の歴史などについて学べる。まほろばの北東には東尋坊ゆかりの地がある。白山平泉寺には東尋坊という僧がいたが、悪僧と呼ばれて嫌われており、最期は現在の越前海岸で突き落とされたと言われている。その海岸が現在の東尋坊岬の名の由来であり、白山平泉寺旧境内にはその東尋坊が住んでいた跡地（写真 2）がある。

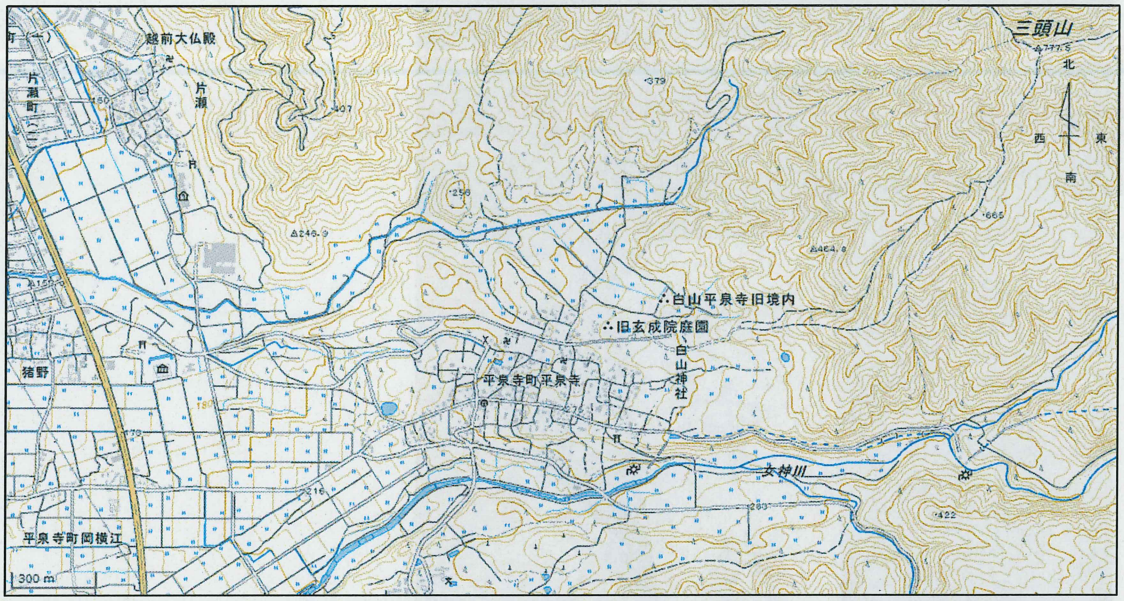

図 3：白山平泉寺旧境内周辺の地形図（2017 年）
（国土地理院地形図より筆者作成）

写真 1：白山平泉寺歴史探遊館まほろば（2018 年 1 月 7 日　龍田　撮影）

中には白山信仰に関する資料や勝山の歴史などについて展示されている。

写真２：東尋坊跡地（2017 年 9 月 8 日　龍田　撮影）

東尋坊が住んでいた跡地に建てられている。

1574 年に一向一揆に敗れて白山平泉寺が焼失した後、当時の学頭である顕海が再興した。現在もその顕海が建てた顕海寺や旧玄成院庭園が残っており、旧玄成院庭園は国の名勝に指定されている。

参道より北には御手洗池という池がある（写真 3）。泰澄大師が白山へ向かう途中に現在の勝山に立ち寄った際、この御手洗池に妙理大菩薩が現れ、泰澄大師はその指示に従って白山登頂を果たしたという。この御手洗池を神聖な場所として祀ることで白山平泉寺の原型ができたと考えられている。

参道の先の拝殿を抜けて奥に行くと社が三つあり、中央が本社、向かって左が大汝社で右が別山社である。本社は一向一揆で失われた後に当時の福井藩主の松平重富によって再建されたものである。本社と大汝社、別山社は白山にある三つの山を表している。本社より南の南谷には、後述する平成の調査によって発掘された石畳（写真 4）などが見られる（白山平泉寺旧境内 HP より）。

白山平泉寺の旧境内はまだ発掘されていない範囲が広く、その上に住宅地や農地などがある。新たに家を建てるなどの現状変更がある場合に備えて、200 ヘクタールの史跡を A から D の 4 つのゾーンに区分けした。A ゾーンは現在の平泉寺白山神社の境内地で、B ゾーンは遺構がよく残る保存整備地域、C ゾーンは人々が居住する地域、D ゾーンは山林や水田、畑地の多い地域である。A、B ゾーンは第 1 種保存地域として史跡の保存を最優先に考え、原則として史跡整備以外の現状変更は認めない地域と定めている。C、D ゾーンは第 2 種保存地域として、現状変更がある場合は事前調査を行い、遺構保存を前提に認めていく地域である（勝山市教育委員会.1997,p39-48）。

1.2. 白山信仰と白山平泉寺の歴史

表 2 は白山平泉寺と白山信仰に関する主な出来事を記した年表である。日本には古来、自然物には神々が宿るという信仰があった。山には川や森、大岩などの他に水源地や動植物など、生活に必要な資源が多く存在する。そのような恵みが与えられるように、また災厄が起きないように、日本では自然物に宿った神々を祀ってきた。

6 世紀中ごろに百済から仏教が伝わってきたが、当時の豪族が日本の神への信仰を守っていたため仏教はすぐに広まらず、徐々に浸透していった。そしてその途中で神々への信仰と仏教が合わさり、山を聖地として山中で修行するという神仏習合の山岳信仰が現れた。山岳信仰では、山で修行することによって験力を身に着けることを目的としている（勝山市教育委員会.1997,p10-11）。

白山を開山し、白山平泉寺を開いたのは泰澄大師という僧だと言われている。白山は福井・石川・岐阜の 3 県にまたがる山で、最高峰の御前峰をはじめとする、大汝、別山の三山からなる。『泰澄和尚伝記』によると、泰澄は 14 歳から 36 歳までの間、現在の福井市と越前町の間にある越知山で修行をしていた。35 歳のとき、夢に女神が現れ、泰澄に白山へ来るように告げた。そこで 717 年、泰澄は 36 歳の頃に越知山を下りて白山へ向かった。そ

写真３：御手洗池（2017 年９月８日　龍田　撮影）

中央の岩に妙理大菩薩が現れたという言い伝えがある。

写真 4：南谷の石畳（2017 年 9 月 8 日　龍田　撮影）

平成元年からの調査で発掘されたものである。

表 2：白山平泉寺及び白山信仰年表（682～2017 年）

西暦（年）	出来事
682	泰澄大師が生誕する。
717	泰澄大師が白山及び白山平泉寺を開く。
1084	白山平泉寺が比叡山延暦寺末になる。
1147	延暦寺と園城寺が対立し、白山平泉寺は延暦寺につく。
1440	白山平泉寺が火災により焼失する。 室町幕府が北陸道七か国棟別銭を白山平泉寺の造営費用にあてる。
1471	朝倉氏が一乗谷を本拠とし、白山平泉寺と結ぶ。
1573	朝倉氏滅亡。 白山平泉寺、越前一向一揆を退ける。
1574	白山平泉寺、一向一揆に敗れて全山焼失する。
1583	顕海が白山平泉寺を再興。 羽柴秀吉が白山平泉寺に禁制札を与える。
1601	福井藩主結城秀康、白山平泉寺に 200 石を寄進する。
1624	徳川家光が白山社領として白山平泉寺に 200 石を寄進する。
1626	福井藩主松平忠昌が白山社領として 100 石を寄進する。
1630	勝山藩主松平直基が白山社領として 30 石を寄進する。
1795	福井藩主松平重富が本殿を造営する。
1859	白山平泉寺、拝殿を再建する。
1870	平泉寺寄進地領の 330 石が全て没収となる。白山平泉寺の名称を廃止し、平泉寺白山神社となる。
1930	平泉寺白山神社境内の旧玄成院庭園が国の名勝に指定される。
1935	白山神社境内が「白山平泉寺城跡」として国史跡に指定される。
1962	平泉寺白山神社を含む白山周辺の 47700 ヘクタールが白山国立公園に指定される。
1989	国庫補助事業で 5 か年計画の範囲確認調査を実施する。
1994	文化庁へ史跡拡大の申請書を提出し、その答申がなされる。
1996	白山禅定道が「歴史の道百選」に選定される。
1997	200 ヘクタールへの史跡の拡大および「白山平泉寺城跡」から「白山平泉寺旧境内」への名称変更がされる。
2012	白山平泉寺歴史探遊館まほろばがオープンする。
2017	白山開山 1300 年祭が行われた。

（史跡白山平泉寺旧境内保存管理計画 1997 および聞き取り調査により作成）

の途中、母の故郷である伊野原（現在の勝山市猪野）を訪れた際、その東の泉に妙理大菩薩が現れ、妙理大菩薩の指示に従って白山登頂を果たしたという。その泉が現在の平泉寺白山神社境内にある御手洗池である（勝山市.2006,p79-80）。

十二世紀頃、一般人が参詣するのに必要な儀礼などを指導する先達の地位が高まった。それまで修験者は霊山に籠って自らの験力を高めようとするものであったが、彼らは一般人の要求に応えるようになった。その結果、修験者たちは山に籠るだけでなく、山麓に住みついて集団が形成されていった。このように形成されていた越前馬場の僧集団に対して、鳥羽上皇がその支配権を延暦寺と対立していた園城寺（滋賀県大津市）の僧覚宗に与えていたことから 1147 年に紛争が起きた。その紛争を経て、白山平泉寺は延暦寺の末寺となった（勝山市.2006,p87-89）。

白山平泉寺は歴史上、二度焼失している。一度目は 1440 年、白山平泉寺は火災で焼失した。その際は室町幕府が白山平泉寺に北陸道七国からの棟別銭の徴収を認め、その棟別銭で建て直した。

二度目の焼失は 1574 年の一向一揆である。白山平泉寺は戦国時代に僧兵が 8000 人いたと言われている。僧侶の住居を坊院と呼び、坊院が北谷には 2400 坊、南谷には 3600 坊、計 6000 坊あり、日本最大級の宗教都市であったとされているが、その一向一揆で全山が焼失した（勝山市教育委員会.1997,p17）。

1584 年、岐阜県境に難を逃れていた当時の学頭である賢聖院顕海が帰山し平泉寺を再興した。また同年、羽柴秀吉の禁制を得て境内全域の保護が図られた（勝山市教育委員会.1997,p17）。

1601 年には当時の福井藩主である松平秀康により 200 石、1626 年には松平忠昌から 100 石、1630 年には勝山藩主の松平直基から 30 石が寄進された。江戸時代の間はこの石高が安堵された（勝山市教育委員会.1997,p17）。

明治時代初期、すでに浸透していた仏教を排斥して新たに神道を国教化するという神仏分離政策がとられた。これは、明治維新の変革は天皇中心の国家体制をつくることを目標としており、その政策により仏教を国教とする考えを改めようとしていたためである。そして神道を国教とするため、神仏習合の神社から仏教的なものが排除されていった。先述の通り、山岳信仰は神仏習合の宗教である。そのため白山平泉寺も対象となり、白山平泉寺から「平泉寺白山神社」という名称になるとともに、それまで持っていた朱印地の返納、福井藩や勝山藩からの 330 石の寄進領の廃止などが行われた（勝山市.1992,p34-36）。

1935（昭和 10）年 8 月、平泉寺白山神社境内の約 14.6 ヘクタールが「白山平泉寺城跡」として国史跡の指定を受け、その範囲が保存されてきた。そして指定地の周辺にも良好な遺構が存在するにもかかわらず、その認識が不足していたために周辺で農村基盤総合整備や圃場整備事業、簡易水道貯水槽・管敷設工事などの開発事業が行われ、遺構の一部が壊された。そういった状況を受け、勝山市教育委員会では 1988（平成元）年から国庫補助事

業で 5 か年計画の範囲確認調査を実施した。その結果、東西約 2 ㎞、南北約 1 ㎞の約 200 ヘクタールの史跡範囲を確定した（勝山市教育委員会.1997p,1-5）。

1992（平成 4）年、史跡白山平泉寺城跡調査整備指導委員会が発足し、文化庁の指導を受けながら指定地拡大への調査を進めた。1994（平成 6）年 1 月には文化庁へ史跡指定地拡大の申請を行い、同年 4 月に文化財保護審議会から文部大臣へ答申がなされた。そして 1997（平成 9）年 3 月に 200 ヘクタールへの史跡拡大および「史跡白山平泉寺旧境内」への名称変更がされた（勝山市教育委員会.1997,p1-5）。2012（平成 24）年 10 月にはまほろばがオープンした。また、2017（平成 29）年に白山開山 1300 年を迎え、それに際してイベントが開催された。

1.3. 白山平泉寺旧境内の保存・活用状況

白山平泉寺旧境内の保存・活用状況についてヒアリング調査を行なった。観光客は 50 代以上が多く、比較的若者は少ないが、秋あたりは学校での利用もある。観光客は県外からも多く、県外からの観光客と県内からの観光客の割合は同じくらいである。県外からの観光客はツアーでの利用が多く、関西地方や東海からの客が多い。

ツアーの中に外国人客も参加していることがある。また、日本人の知人と一緒に訪れていたり、単独で欧米系の外国人がバックパッカーとして来たりするということもあり、外国人の観光客は徐々に増えているという。

観光客数は 5 月のゴールデンウィーク、9 月から 10 月の行楽シーズン、シルバーウィークなどに多くなる傾向にある。8 月はツアーでの利用が少ないが、帰省のついでなどで訪れる人々がいるため、観光客数は多い。冬は勝山市全体で降雪し、特に境内には積雪して入ることが困難になるため、観光客数は減少する傾向がある。

学校の課外活動などでの利用については、勝山市について勉強するような総合教育や社会学習のプログラムの一環に組み込まれることがある。

課題として挙げられるのは、ジオサイトに含まれているがジオパークとの関わりが薄いこと、保護しながら活用しているため規制などのバランスが難しいことなどがある。

白山平泉寺旧境内を訪れる観光客の中には、美しいコケ（写真 5）などの景観を目的に訪れる者も多い。白山平泉寺旧境内の景観は人気であり、パンフレットなどにもコケが美しいと紹介されることがある。その景観を守るため、除草活動やごみ拾いが年に数回行われる。行なっているのは主に平泉寺区の住人や有志で集まったボランティアであり、多い場合は 100 人ほど集まることもある。平泉寺区ではこのような除草活動や清掃活動を地区の活動としている。

ジオパークとの関わりが薄い理由には、ジオパークの核心である地球科学とのつながりが見えにくいことなどが挙げられるが、実際は白山平泉寺の成り立ちは地学的背景がある。白山信仰は山の水を平野部へ分け与える、水分りの神の信仰であると言われる。白山信仰の三馬場は白山山系の河川周辺の平野部に立地しており、加賀馬場は手取川、美濃馬場は

写真 5：境内の景観（2017 年 9 月 8 日　龍田　撮影）

白山平泉寺旧境内にあるコケとその景観である。これを目的に観光客が訪れることも多い。

長良川、白山平泉寺の越前馬場は九頭竜川の周辺に所在している。また、泰澄大師が妙理大菩薩を拝んだと言われ、白山平泉寺の名前の由来にもなった御手洗池（写真 3）は僧侶の修行の際、神仏に水をささげることにも利用されたと言われる。このように、白山平泉寺の背景には九頭竜川や水源との深い関わりなど地学的つながりが非常に強いサイトである。勝山ジオパークの中では、九頭竜川などの河川とその地形エリアに含まれる重要なカルチュラルサイトだと言える。

2. はたや記念館ゆめおーれ勝山

2.1. はたや記念館ゆめおーれ勝山の概要

ゆめおーれ勝山（写真 6）は、勝山市で盛んに行われ、市の基盤産業にもなった織物業の歴史や現在に至るまでの様子などを展示した施設である。勝山市街地の中心部に位置し、周辺には市役所の他、住宅地、市立図書館などがある。また、建物の南側は工場地域になっており、多くの繊維工場が並んでいる（福井県勝山市.2008,p1）。

ゆめおーれ勝山の建物は 1905（明治 38）年から 1998（平成 10）年まで操業していた旧木下機業場の工場棟の一部である。木下旧機業場は 5 棟の工場、玄関・事務所棟、糊付け場とそれらを繋ぐ渡り廊下などの全体で 3370 ㎡であったが、大部分が解体され、現在は 1904（明治 37）年に建てられた第 1 工場棟と 1915（大正 4）年に増設された第 2 工場棟の一部、糊付け場、玄関、事務所、渡り廊下などが残され、ゆめおーれ勝山として活用されている（福井県勝山市.2008,p2-4）。すでに取り壊された敷地はふれあいスペースやトイレ施設、駐車場になり、普段は客が自由に使い、イベントなどの際にはイベントスペースとして使用される。

館内の 1 階はウェルカムゾーンとなっており、「たまご工房エグエグ」というカフェやイベント・体験ホール、お土産コーナー、体験コーナーなどがある。たまご工房エグエグの経営は勝山市ではなく、民間企業が行なっている。イベント・体験ホールでは期間限定の展示などを行なっており、内容は勝山市の民家で実際に使用されていた織物の機器であったり、織物業が盛んであった明治時代の北海道開拓について言及していたり、展示されているものは多様である（はたや記念館ゆめおーれ勝山 HP）。

お土産コーナーでは織物業に関する勝山市独自のものもあり、蚕の繭の成分から作った絹石鹸や勝山市で織られた布製のカードケースなどがある。体験コーナーでは機織りの仕組みを利用したオリジナルコースターづくりや蚕の繭を使用して恐竜や動物をつくる繭玉クラフトなどが体験できる。

2 階はミュージアムゾーンとなっており、民家で営まれてきた織物についての説明やその際に使用されてきた機器、工場で使用されていた大がかりな機材、織物業の発展、それに関わって発展してきた勝山市の歴史などについて展示されている。写真 7 はミュージアムゾーンに常設されている体験スペースである。水中に沈めた蚕の繭から糸を引き、機器のハンドルを回すことによって糸が巻きつかれていく様を見ながら体験できる。このとき繭の糸に水を含ませるのは、糸を湿らせて糸切れを防ぐためである。

また 2 階にはガイドが常駐しており、それぞれの展示の説明をしてもらえる。勝山市で織物が発展した概要のほかに、織物業に関わらない、勝山市全体の歴史について説明できるガイドもいる。

2.2. 勝山における織物業とゆめおーれ勝山の歴史

表 3 はゆめおーれ勝山とそれに関わる主な出来事をまとめた年表である。江戸時代後期、

写真 6：はたや記念館ゆめおーれ勝山（2018 年 1 月 7 日　龍田　撮影）

建物は実際に使われてきた機業場を利用している。

写真 7：蚕の繭巻き取り体験コーナー（2017 年 3 月 13 日　龍田　撮影）

蚕の繭は水の張った器に入れられている。

表 3：はたや記念館ゆめおーれ勝山及び勝山の織物業年表（1874～2015 年）

西暦（年）	出来事
1874	勝山製糸会社が操業する。
1896	勝山市で大火が起こる。これにより勝山製糸会社が消失する。
1903	福井県の絹織物生産シェアが日本一となる。
1904	国が煙草を専売制にする。
	木下機業場の工場が建設される。
1915	木下機業場の工場が増設される。
1998	木下機業場が操業終了し、工場の大半が解体されたところに保存を望む声があがり、一部が残された。
2003	旧木下機業場が既存建造物活用事業として保存活用することが決定する。 旧木下機業場およびその跡地の利用に関して、基本コンセプトや機能などについて定めた。
2006	旧木下機業場が勝山市の有形文化財（建造物）に指定され、「勝山旧機業場」へと改称される。
2007	勝山旧機業場が経済産業省の産業遺産の絹織物関連遺産に指定される。
2009	勝山旧機業場が「はたや記念館ゆめおーれ勝山」としてオープンする。
2013	はたや記念館ゆめおーれ勝山の休館日が年末年始のみとなる。
2015	はたや記念館ゆめおーれ勝山 2 階の観覧が無料となる。

（福井県勝山市（2008）及び聞き取り調査により作成）

勝山藩は藩政改革、殖産興業政策の中で勝山の風土に合った「煙草」と「生糸」の生産を奨励した。明治 20 年代には福井県に羽二重を織る技術が伝わった。羽二重は絹地を滑らかな手触りに仕上げたものである。同時期、海外で羽二重の需要が高まったため、輸出用羽二重の生産が福井県で盛んになっていき、1903（明治 36）年には福井県は絹織物生産のシェアが 24.8%となり日本一のシェア数となった。当時の調査によると、日本の羽二重輸出の約 6 割が越前産であったという。勝山市でも明治 30～40 年代には生糸生産中心から羽二重などの織物業中心の産業へとシフトしていった。明治時代末期には県内有数の羽二重生産地に成長し、織物業が発展していった（勝山市.1992,p199-207）。

勝山で織物業が成長した要因として、1896（明治 29）年 3 月に市街地の約 6 割を焼失する大火が起きたことによる多くの煙草畑の焼失、1901（明治 34）年の景気後退、1904（明治 37）年の国による煙草の専売制なども挙げられる。特に 1896 年の大火による煙草畑の焼失や 1904 年の煙草の専売制によって、それまで勝山市を代表する産業の一つであった煙草生産が衰退した。そして同じように勝山市で生産されていた生糸やそれを使用した織物業が注目され、多くの事業主が織物業へと転換していった（福井県勝山市.2008,p1-2）。

明治時代終わりごろには勝山市をはじめとする県内各所で水力発電所が作られ、織機が人力から動力を利用するものへと転換された。それにともない勝山市でも動力を利用した織機が広まり、織物工場が増加した（勝山市.1992,p207-208）。また大正時代初期には県内で鉄道網が整備されて大量輸送が可能になり、1913（大正 2）年の第一次世界大戦による特需もあり、織物業は輸出産業として発展した。当時は絹織物が主要であったが、第一次世界大戦後の不況により絹織物の輸出が減少した。同じ頃、日本国内で合成繊維を使用した人絹糸（レーヨン）の生産が開始し、従来の絹織物業者の中でも人絹織物へとシフトしていくところが増えていった（勝山市.1992,p417-419）。

昭和時代になると国産人絹糸の品質や生産量が向上し、福井県内でも絹織物から人絹織物への転換が急速に進んでいった。1932（昭和 7）年には福井市に世界初の人絹取引所が創設され、福井県は世界的な人絹織物の産地として成長していった。このように福井県は織物大国として成長していたが、日中戦争や第二次世界大戦の勃発により織物業は平和産業とみなされ、産地の規模は最盛期の 3 分の 1 まで縮小された（はたや記念館ゆめおーれ勝山.2011）。

その後、化学・合成繊維の生産が行われ始めた。当時、欧米から導入された新素材の開発技術を十数年かけていき、昭和 20 年代末期には化学・合成繊維の生産が定着した。さらに昭和中期には染色加工やレース編、製紐業など技術の多様化が進み、現在に至る（勝山市.1992,p765-794）。

勝山は白山をはじめとした山々に囲まれた盆地地形であり、年中を通して湿度が高い。冬季に太平洋側では乾燥しているのに対し、勝山市では平均湿度 100%という日がある。このような高い湿度は、生糸を織る際に発生する静電気を抑え、糸切れが少なくなるという織物に適した環境である。こういった気候も織物業が発展した要因である（勝山

市.1974,p56)。

また写真 7 の蚕の糸巻き体験コーナーでも水を使っていたように、織物業では大量の水を要する。勝山市の工場では、勝山市の豊富な地下水を利用し、その地下水を工場の上から流して使用していた（聞き取り調査より)。

旧木下機業場は 1905（明治 38）年から 1998（平成 10）年まで操業していた。旧木下機業場の廃業後、当初は建物の全てを取り壊す予定であったが、解体作業に着手したところに、勝山市の近代化を支えた繊維産業の歴史を知る貴重な建物であるため保存をすべきだという声があがった。その結果、調査・検討され、現在のような約 2 棟分の建物が残される形となった（福井県勝山市.2008,p5)。

解体が中止された当時、残された旧機業場を勝山市が一時的に倉庫として利用する一方で、2003（平成 15）年には「旧木下機業場および跡地利用検討委員会」が発足され、建物の保存活用の方向性を検討した。この委員会による「委員会検討報告書」では「往時の建物の雰囲気を活かした施設の保存と展示の実施とともに、市民の交流の場、文化的賑わい空間の創出」という基本コンセプトを定めた。また、建物の保存と活用についてはミュージアム機能、交流機能、情報発信機能、周辺施設との連携の必要性、広場ではイベントなどによる交流や水辺空間の創出の必要性について報告されている。これらは現在のゆめおーれ勝山の活動に活かされている。その一方で、具体的な展示内容や市内産業遺産全体の活用の問題、エコミュージアムのあり方、周辺施設との具体的連携や駐車場確保についてなどを課題としている（福井県勝山市.2008,p5)。

同年 9 月には前回の検討内容を進め、「今後さらに検討を要する課題の報告書」を取りまとめている。この中で次の五つの事柄について検討された。①保存・展示する織機、器具類および内容②市内産業遺産全体の保存・活用についての考え方③エコミュージアムの活動方法とコア施設のあり方④周辺施設との具体的連携方法⑤市街地における駐車場の確保。このような経緯と共に、勝山市では 2003 年度から「旧勝山城下周辺まちづくり事業計画」が開始され、旧木下機業場は既存建造物活用事業として保存活用することが決定された（福井県勝山市.2008,p5)。

解体されず残された面積のうち、屋根裏倉庫として床面積に参入されない部分を差し引いた 999 ㎡が 2006（平成 18）年 12 月に勝山市の有形文化財（建造物）に指定され、これに伴い旧木下機業場から「勝山市旧機業場」へと改称された。また、2007（平成 19）年 11 月には経済産業省の近代化産業遺産の絹織物関連遺産にも認定された（福井県勝山市.2008,p2)。

2009（平成 21）年には「はたや記念館ゆめおーれ勝山」としてオープンした。この名称は 358 点の応募の中から選ばれた。当初は休館日が年末年始の 12 月 29 日から 1 月 2 日の他に毎月第 2・4 水曜日も休館日だったが、2013（平成 23）年から年末年始のみ休館となった。また、当初はゆめおーれ館内の 2 階は有料であったが、2015（平成 27）年より観覧無料である（聞き取り調査による)。

2.3. ゆめおーれ勝山の活用状況

ゆめおーれ勝山の保存・活用状況についてヒアリング調査を行なった。ゆめおーれ勝山への観光客は様々な年代が幅広く訪れ、特に休日は家族連れが多い。これは 1 階の体験コーナーを目当てに親子連れが多いためである。

オープン当初は勝山市内からの観光客が多かったが、現在は市外からの客が約半数であり、県外からの客も多い。県外では北陸地方が多く、関西地方や北陸地方、東海地方も多い。北陸新幹線が石川県まで開通した影響からか、近年は関東地方からの観光客が増えてきた。外国人客は少ないが、ここ数年で少しずつ増えている。そのため課題として、言語の通じない外国人客への対応があげられる。

観光客数はゴールデンウィークや夏季休暇などの影響を受ける 5 月や 7，8 月が多い。9 月は減少するが、10 月の行楽シーズンに増加する傾向にある。冬季は白山平泉寺旧境内同様、積雪の影響で観光客数は少ないが、企画で興味を持った人々に来てもらえるように展示などを工夫している。また、2 月に周辺で左義長祭りが開催される影響で、冬季にもかかわらず観光客数が増加する。

当初、教育的利用は行われていなかったが、教師をしていた人が退職した後にゆめおーれ勝山の運営に回り、そこから教育的利用がされるようになった。地域の学校とコンスタントに連携している訳ではないが、勝山市について勉強するような総合教育や社会学習のプログラムの一環に組み込まれることがある。また、ゆめおーれ勝山の学芸員が市内の小学校などに出向いて特別講師という形式で講義を行うこともある。

勝山の織物業は江戸時代の生糸生産から始まり、現在の織物、繊維産業まで変化してきた。それらの産業は文明開化後の勝山を支えてきて、勝山を語る上で外すことはできない。それらの産業が栄えた背景には、一年を通して高湿度という勝山の気候や豊富な地下水が深く関わっている。年中高湿度になることも地下水が豊富なことも、勝山の地質・地形によるものである。元来の勝山の風土に合った生糸生産から始まり、その後も化学繊維などに形を変えながら、現在も勝山を支えている産業となっている。その歴史を学ぶことは勝山を学び、郷土への価値を見直すことに繋がるため、ゆめおーれ勝山を保存・活用することは勝山市に必要なことであると考える。

第5章：勝山ジオパークにおける文化遺産

ジオパークは地学的価値の高い遺産や地学的な繋がりのある遺産を保護・活用していく。地学的な繋がりがあり、それが顕著に表れている遺産はジオパークの目玉になりやすいが、地学的な繋がりがあっても見えづらいという遺産には焦点が当たりづらい。勝山ジオパークにおける北谷の恐竜化石発掘地や大矢谷白山神社の巨大岩塊、七里壁などは地学的な繋がりが見えやすい。恐竜や恐竜化石、火山噴火や河川の浸食によってできた地形など、地球の歴史や大地の変動と直接的に関係があり、その痕跡が目に見えるためである。その一方で、地学的な繋がりがあっても間接的であるため、その繋がりが見えづらいサイトがある。勝山ジオパークのカルチュラルサイトでは、白山平泉寺旧境内は九頭竜川の付近の火山傾斜の上にあり、九頭竜川との関係や敷地内の御手洗池が白山平泉寺の成立要因に深く関わっている。また、勝山で織物業が発展した要因である高い湿度は、勝山が複数の火山をはじめとした山々に囲まれた盆地であることが関係しており、織物業で使用する水は勝山の豊富な地下水を利用している。このように、白山平泉寺旧境内もゆめおーれ勝山も両方勝山の自然環境で成立してきたものであり、勝山と地学的な繋がりが強い。

ジオパークの定義に、「博物館、自然観察路、ガイド付きツアーなどにより、地球科学や環境問題に関する教育・普及活動を行う」「ジオツーリズムなどを通じて、地域の持続可能な社会・経済発展を育成する」とある。ジオサイトやカルチュラルサイト、エコロジカルサイトは保護・保全するだけでなく活用もしていく必要がある。その際、ただ活用するのではなく、「地球科学や環境問題に関する教育・普及活動」や「持続可能な社会・経済発展の育成」を心がけなければならない。教育・普及活動を行うには、個人で来て見学して帰っていく観光形態では難しく、ガイドなどの利用が推奨される。実際、白山平泉寺旧境内にもゆめおーれ勝山にもガイドがいる。

ジオパークとは地球・大地の変動やその歴史が多様な生態系や多くの人間の文化などに影響し、全てつながっているということが意識でき、学べる場所である。客が個々でジオパークを訪れて観光をして帰るという観光形態ではこういった繋がりや影響を学ぶことは難しく、現在の勝山市のジオガイドにはこの繋がりを上手く説明でき、客に興味を持ってもらえるような話ができるガイドは少ないという。白山平泉寺旧境内やゆめおーれ勝山には歴史や景観に興味を持って訪れる客が多い。その歴史や景観の背景に地学的要素が絡んでいることを、客が興味を持てるように説明するのは困難である。本当に興味のあること以外を説明されても覚えられない上に、ストレスに感じる。もしも観光客が白山平泉寺や織物業が勝山で栄えてきた理由に疑問を持ったとき、要因に地学的なものがあったことを説明できたらよいだろう。

ジオサイトやカルチュラルサイト、エコロジカルサイトは保護・保存するだけではならない。価値を知らずに保護をしていても無意味で、それを保護する理由や、保護するだけの価値があるのかについて知る必要がある。白山平泉寺旧境内はその価値が知られていなかったために遺構の一部が開発事業で破壊され、現在のゆめおーれ勝山の建物として利用

されている旧木下機業場は一部が解体されてしまった。そのような過ちをもう犯さないためにも価値を学ぶことが必要になってくるが、学ぶために活用すると遺産が破損する可能性もある。そのため、保護・保全と教育・活用のバランスが重要である。

また、白山平泉寺旧境内はまだ発掘されていない遺跡がある。その発掘されていない遺跡を発掘するとコストもかかり、その際に遺跡を破損させてしまうリスクもある。現在は調査した内容をまとめて整理しているため、今後まだ発掘作業が進むのか、もしくはこのまま保護していくのかは未定である。

白山平泉寺の歴史や価値を知るには現状でも充分で、遺跡が壊れるリスクを冒してまでこれ以上発掘する必要はないと考える。ただし、まだ発掘されていない部分も含めて 200 ヘクタールの遺跡があるということは必ず知っていなければならず、勝山市民を含めて広く知られるように努める必要がある。そして白山平泉寺が勝山市で成り立った理由に地学的要因が深く関わっていることを伝えていくことで、勝山市自体の価値への認識や理解につながる。

地学的繋がりがよく見えるジオサイトはジオパークの地学的価値を理解しやすい反面、自分たちの生活や文化に関わりがあるということを意識しにくい。その点、白山平泉寺旧境内やゆめおーれ勝山のようなカルチュラルサイトは地学的繋がりが見えづらいが、その地学的結びつきを知れば人々の文化や生活に地学的な繋がりが関係していることを意識できるようになる。そのような意識は勝山の文化や伝統、遺産を守り、伝えていこうという意識につながるだろう。そのような意識を育むためにも、勝山ジオパークとして文化遺産は保護し、活用していく必要がある。

ゆめおーれ勝山は白山平泉寺旧境内と比べて歴史が浅く、活動が始まった頃に勝山ジオパークの活動が始まったため、結果としてジオパークとの関わりが大きくなり、ゆめおーれ勝山にとってジオパークの活動は重要となった。一方で白山平泉寺旧境内はジオパークとの関わりが少ない。これは勝山ジオパークの活動が始まる以前から観光・保護が行われてきたためである。従って、ジオパークとして関わらなくてもジオパークの目的である教育・普及活動や伝統と法に基づいて確実に保護することなどが行われてきているため、白山平泉寺旧境内は無理にジオパークとして組み込む必要はないだろう。勝山ジオパークは、ゆめおーれ勝山はカルチュラルサイトとして積極的に活用していき、白山平泉寺旧境内は本来行われてきた活動をサポートしていく必要があると考える。

第 6 章：おわりに

本研究は白山平泉寺旧境内とゆめおーれ勝山を事例に、恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークにおける文化遺産の保存・活用状況やジオパークとの関わりについて解明することを目的としてきた。

ジオパークとは地球・大地が長い歴史の中で変動した痕跡やその上で成り立ってきた生態系、人々の生活、文化、産業、歴史などを保護・活用していく取り組みである。ジオパークの保護・活用の対象となり、重要な地学遺産をジオサイト、生態学遺産をエコロジカルサイト、文化的遺産をカルチュラルサイト、博物館などの施設を拠点施設として指定する。勝山ジオパークでは「恐竜はどこにいたのか？大地が動き、大陸から勝山へ」をテーマに、恐竜や恐竜化石、火山活動によって形成された地形、河川の働きや湧水、それらと関わって勝山市で育まれてきた文化などを扱っている。勝山ジオパークは恐竜や恐竜化石をメインテーマに掲げているが、新たな拠点施設を設立したり、新たに町歩きガイドを行なったり、恐竜や恐竜化石以外の遺産にも目を向けられるように工夫している。

白山平泉寺旧境内は 717 年に開かれた白山信仰の拠点である白山平泉寺の跡地だ。白山平泉寺旧境内は九頭竜川や湧水があり、白山と隣接している勝山の風土で成立した遺産である。また、「勝山」という地名の要因にも関わっており、勝山を語る上で外せないものである。

ゆめおーれ勝山は勝山の基盤産業にまで成長した織物業の歴史や現在までの様子を展示した施設であり、建物は明治時代から平成まで操業していた旧木下機業場を保存・活用している。勝山では江戸時代から生糸生産が盛んに行われており、そこから発展して現在の織物業・繊維業へ転換していった。生糸生産には水を使用しており、その水は勝山の豊富な地下水を利用してきた。また、勝山は多くの山々に囲まれた盆地地形である。そのため一年を通して高い湿度を保っており、その高い湿度は静電気の発生を抑制し、生糸が切れるのを防ぐ。このように、勝山で織物業が盛んになった背景にも地学的要素が深く関係している。

ジオパークは地学的価値の高い遺産や地学的な繋がりのある遺産を保護・活用していく。そのため、勝山ジオパークの恐竜発掘地や大矢谷白山神社の巨大岩塊のように地球・大地の変動や歴史の痕跡が目に見えるサイトはジオパークの目玉になりやすいが、白山平泉寺旧境内やゆめおーれ勝山のようなカルチュラルサイトは地学的な繋がりが間接的で、説明されるまで気づきにくい。その見えにくい繋がりを説明する存在としてガイドがいる。ジオパークを知らない人々にも地域の地学的な結びつきを説明することによって、ジオパークの目的の一つである「地球科学や環境問題に関する教育・普及活動」に繋がる。教育・普及活動を行うことでその遺産の価値や遺産を保護する意味を学べる。また、地学的な結びつきを知ることによって地域の価値への認識や郷土への理解に繋がり、伝統や遺産を守っていく意義を知れる。

ジオパークにおける文化遺産は、地域で培われた文化や、身近な生活・文化と地域の地

形・地質などの自然環境との関わりを学ぶ場所である。身近な文化や生活が地域の自然環境によって成立してきたと学ぶことは、地域への理解につながる。ただし、ゆめおーれ勝山のように勝山ジオパークの取り組みとして深く関わっていくべき対象と、白山平泉寺旧境内のようにサポートしていくべき対象がある。勝山ジオパークはそれを考慮した上で、ジオパークとして文化遺産を保護していく必要があると考える。

謝辞

調査に関しまして、白山平泉寺歴史探遊館まほろばの柏村様、はたや記念館ゆめおーれ勝山の松村様、勝山市役所のジオパークまちづくり課及び史跡整備課の皆様、お忙しい中貴重なお時間を割いていただき誠にありがとうございました。至らない点もあったと思いますが、大変お世話になりました。

論文執筆に当たりましては、ご指導いただいた新名阿津子先生、およびポスターセッションでアドバイスをいただいた藤田先生、重田先生、本当にありがとうございました。的確なご指導のおかげで論文を完成させることができました。

また同期のゼミ生や同ゼミの後輩の皆様、多くの疑問点や鋭い指摘をくれてありがとうございます。お陰さまで気づけなかったミスなどに気付けました。

皆様のおかげで論文を形にすることができました。ここに感謝申し上げます。

なお、本研究では平成 29 年度勝山市ジオパーク学術研究等奨励事業「恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークにおける文化遺産の保存と活用」（研究代表者：龍田貴大）を使用した。

参考文献

・勝山市 1974 『勝山市史 第 1 巻：風土と歴史』 勝山市.

・勝山市 1992 『勝山市史 第 3 巻：近代・現代（明治・大正・昭和）』 勝山市.

・勝山市 2006 『勝山市史 第 2 巻：原始～近世』勝山市.

・勝山市 2017 『白山平泉寺：よみがえる宗教都市』 吉川弘文館.

・勝山市エコミュージアム推進計画
http://www.city.katsuyama.fukui.jp/docs/page/index.php?cd=650（最終閲覧日：2018 年 2 月 16 日）.

・勝山市教育委員会 1997 『白山平泉寺旧境内保存管理計画 1997』 勝山市.

・勝山市商工観光部観光政策課『奇祭「勝山左義長」と勝山市文化財のご紹介』
http://www.city.katsuyama.fukui.jp/kankou/sagityo/（最終閲覧日：2018 年 2 月 16 日）.

・勝山市 HP　http://www.city.katsuyama.fukui.jp/docs/（最終閲覧日：2018 年 2 月 7 日）.

・恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク HP
http://www.city.katsuyama.fukui.jp/geopark/（最終閲覧日：2018 年 2 月 7 日）.

・国史跡白山平泉寺旧境内 HP
http://www.city.katsuyama.fukui.jp/heisenji/（最終閲覧日：2018 年 2 月 7 日）.

・日本ジオパークネットワーク HP
http://www.geopark.jp/（最終閲覧日：2018 年 2 月 7 日）.

・白山ユネスコエコパーク HP
http://hakusan-br.jp/（最終閲覧日：2018 年 2 月 16 日）.

・はたや記念館ゆめおーれ勝山 2011 年 『ふくい織物がたり No.2』 はたや記念館ゆめおーれ勝山.

・はたや記念館ゆめおーれ勝山 HP
http://www.city.katsuyama.fukui.jp/hataya/（最終閲覧日：2018 年 2 月 7 日）.
・福井県勝山市 2008 『勝山市有形文化財勝山市旧機業場修理工事報告書』 福井県勝山市.
・平成 29 年版「勝山市のすがた」
http://www.city.katsuyama.fukui.jp/docs/page/index.php?cd=26（最終閲覧日：2018 年 2 月 18 日）.